<table>
<thead>
<tr>
<th>品目</th>
<th>スミス氏とコンディャック氏の価値説 アダム・スミス生誕二百年記念號</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>作者</td>
<td>田島 錦治</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>經済論叢 18(1): 105-138</td>
</tr>
<tr>
<td>出版</td>
<td>京都大学出版センター</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/128117">https://doi.org/10.14989/128117</a></td>
</tr>
<tr>
<td>入庫</td>
<td>部門別研究論文</td>
</tr>
<tr>
<td>入庫</td>
<td>営業論叢 1924年1月</td>
</tr>
<tr>
<td>入庫</td>
<td>部門別研究論文</td>
</tr>
</tbody>
</table>
会学経学大同国帝都京
叢論濟経

号一第 巻八十第
号念記年百二誕生スミス・ムダア

口縫
スミスの肖像・筆蹟・國富論初版扉・記念冊名真

道德的價值判断におけるスミスの思想
斯密スとハンデックとの價值論
斯密スの所謂真理の価格論について
斯密スの価格論と分配論
斯密スの自然主義観と自由政策の見地
スミス自由放任論の特徴
スミスの租税原則
スミスの公債論
スミスと世界経済学
斯密斯の對殖民地策
法学博士
法学博士
法学博士
法学博士
高学士
高学士
高学士
高学士

記事
スミス記念会記事
本庄榮治郎

書目
スミス関係書目
田口正太郎
本庄榮治郎
第一章 緒
論
スミス氏とコンデュック氏の価値説

田島 錦治
然れども自然法則学派の説は著偏狭にしてデミリ氏の説の廣汎平正なるに若者、文学者に
齋が "自自然法則学派は狭小頼り外を優し知らず、デミリ氏の
説は中央の最高地点に立て四方を
観む如し "と謂へば蓋し通評と謂ふべしなり。 （Gale et Rass. Histoire des doctrines économ-
iques, t. 2.)
十九年より千八百二十年に至る二十年間に於て四種の譯書を出したりと云ふ。然にコンデック氏の著書は前記の如く千七百七十六年に於て初版を和蘭のアムステルダム府にて出したもの外は、

一巻中に「Liber Perturbationum」コニの次、コンデック氏の第一巻出

此著書を掲げたるを見に止まれり。スマス氏の書が弘々世に行はれたるは恒より其所なりと謂はざるを除

かし得しぇて難く、コンデック氏の書の多く世に知られざるは、實に偶然の不遇不幸と謂せざるを除

かし得しほう酒に止まれり。スマス氏の書は全世に於て既にコンデック氏の

在る往古に於て親交を著せたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたるを見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデック氏の書を掲げたる見る所なり。見にコニの次にコンデッ
第二章：スミス氏の価値及び価格説の要領

前を通べたる如く、スミス氏の書は欧米各國語に譯せられ、又邦語に譯せられ、且氏の諸説は顧る人人口に時矣せるが故に、余は謹に呈氏の価値及び価格説の要領を挙げるに止む、而して次章に於ては反にコンシュレ氏の説を更べべく詳細に紹介する所あるものと故す。

斯の如くしては小なる交易価値を有し、又は全く之を有せざることあり。前者は之を交易価値（E. E.）と申す。最長大なる使用価値を有する物が、時とし、金銅石の如きは後者の例なり。（国民の富，第一巻第四章）

スミス氏の説をゆる使用価値を戯は今日の経済学者の説に比する用法（＝経済価値）又は主観的価値に同じ。今日の経済学者は用並に交易価値を全然無関係か若くは相背反する観念の如くに取扱ひ、且も、スミス氏は交易価値の問題は之を誇張に束ねて、単に交易価値ののみに就て、官
ファッションולים

スミス氏の価値説について

ある時、スミス氏は商品の価値について考えた。彼は、市場での物価が商品の価値を反映していると主張した。彼の考え方は、物の価値が市場で決定され、市場で最も値が高い物が一番価値があると主張している。

しかし、彼の考え方は批判を受ける。市場での物価は、物の価値を反映しているとは限らない。物の価値は、生産コスト、需給状況、需給相関等の要素により変動するからだ。

そこで、彼は物の価値を決定するもう一つの要素を見つけることにした。彼は、物の価値は生産コストと需給状況の両方により変動するものであると考えた。そして、物の価値は市場での物価を超えるものであると考えた。

この考え方は、後の価値論を形成するにあたり、重要な役割を果たした。
足するも決して容易ならざるべし。但し此事はスミスの既に自覚したてられた所なり（第一卷第五章）
故に彼は曰く、総合労動はすべての貨物の交易価値の等の測度なりと雖も等の価値の等の
測るるは容易に依らす。この異なるたる労動の量の間の比例を確知するすることは往々困難なりり

次に起る難問は文明社会に於ては、労動のみを以てしては物を製作するに不充分なる事はな
り。卽ち労動の外に土地及び資本を要し、而して土地及び資本は之を無償にて使用するを得す。

而して此事は亦スミス氏の認める所なり（第一巻第五章）

論職
スミス氏に於ては

第十八巻
第一編
一三〇三三
論収　スミス氏とミッチェル氏の価値説

第十章　第一巻　一四　一四

前に於て述べた如く、後に産業費即ち労資、地代、及び利益（
（））を以てす。而し
て前論第一の假説が社会主義の採る所となりたるに反して、此第一
の假説は後世の経済学者即ち
ジヴァン氏より以前の正統学者の重に採る所となれり。夫れ斯の如く、スミン氏は三種
の矛盾なる説を生ずるに至りしのに如し。例へば或處にては利潤及び地代を以て労資
及び地代が費用のみなる価値成立の根源となり、又他の處にては利潤及び地代を以て労資
及び地代が費用のみなる価値成立の根源となり。斯考は皆も社会主義者の説に似たり。第一
巻　第六章　第一巻　一四　一四

斯の如くスミン氏の矛盾は先儒の既に願々指摘したる所なる（（））然れども要するにスミン氏の二個の假説中、生産
費説が優位を占める如し。スミン氏は産業費に一致する所の価値を物品の自然的価値と名け、市
場価値は供給されるる価値が需要されたるを分量に比して減少するか又は増加するかに従ひて
或は自然価値を越へ、或は之より下るものなりと考えたり。
価格を立てて説明するためには、最終価格を求める方法を示すことが必要です。その方法は、物の価値に比例して価格を設定することです。すなわち、価格は物の価値に比例し、物の価値が上昇することで価格も上昇し、物の価値が下落することで価格も下落するという関係性があります。

第二章 コンダック氏の価値及び価格説

コンダック氏の価値及び価格説は、価格を決定するための理論を示すもので、価値論に基づいて説明しています。価値論は、物の価値を決定する要因を分析し、価格を設定するための基盤を提供します。

価値論には、物の価値を決定する要因として、物の生産価格、物の需要、物の供給、物の需要の増減、物の生産の増減、物の品質、物の量、物の形状、物の用途、物の用途の変化などがあります。

価値論に基づいて価格を設定するためには、これらの要因を考慮することが必要です。特に、需要の変化や生産の変化に伴う価格の変動を把握することが重要です。
第一物の価値の根本

例へば壌に独立せる一群の士民なり、他の士民とは孤立して未だ交通せず、只其耕作する田野の生産物のみに由りて生活しつつあり。今彼等が第一の収穫を為したり、若し彼等の田畑の生産物の験りに生産し得べしと假定する量を除きて、毎百石（原文には「百石」）より倍りに石を除く上の小麥を除くに足るのみならず、彼等の心配なりしに生産し得べしと假定する量を除きて、次の収穫期まで缺乏の心配なしに生活し得べしと假定するに足るのみならず、彼等の心配なきに足るものなるを要す。換言すれば、小麦の量が充分の或程度に在ることを要べし。蓋し缺乏の心配なしに除くに足るのみならず、彼等の心配なきに足るものを要す。換言すれば、小麦の量が充分の或程度に在ることを要べし。故に若し彼等が其上に若干石を見なならば、彼等は過剰の地位に在るといふ可く、之に反して、假定の百石より少量を見なならば、彼等は缺乏の地位に在りといふ可なり。
は、此知られた比は、同様正摂に彼等が充分か過剰か又は缺乏かの何かかの地位に在ることを
然れども彼等は此の比を正確に判断するを得ず。何となれば彼らの小麦の分量並に彼等が之を
消費するに要する分量を共に正確に定まるべき何等の手段を有させられるならば。況々彼等は小麦を減損
なしに貯蔵すること能はず、又此減損の量を正確に瞭知すること能はずるに於ても。故に彼等
が判断し得るは唯推量に止まり、又数年来の経験を基礎とするものに止える。それは、如何様に判
断するにしても、彼等が缺乏の心配を全く無くす丈より以上を有すと考ふ時は、不足の地位に
在りを信じし。彼等の統の心配を無くす丈より以上を有すと考ふ時は、過剰と信じし。彼等が浪
費（過剰）するには、不足なる分量を有するに過ぎずと考える時は、不足と信じるためになる事は
常に想當然なりとす。
論収
しの氏とコンテッサ氏の仮想

第十八巻  第二部  二八  一文

その注意を取らぬならば、小姿を踏らし又は踏らしむるに於て、斯くして此の等の腹分のものは竟
次を年々向して何等の用途に供さされずに了らばら。故に彼作が数年経のときは土民が唯無
用なる過剰の小姿を持餘すべきすることとなり、遂には土地に播種する分量を少なくするに至るべし。

然れども収穫が往々共人民の需要を充足するに不充分なること有るを以て、彼等は数年にして土民
を満足するの必要を感するに至る。斯くして其収穫の時に不用のもののが八石からなり、

蓋し人が小姿を貯むこと知りたる時には、小姿の過剰といふ事は最早これ無しと謂ふべし。

何となれば人若し数年にして消費せずとも、彼の年に之を消費するを以てなり。若し此土民が他の諸土民に
通常せられたるとき、而も皆農を交ぜたるものに至るべし。何となれば此等の諸土民は交易に依って有無
倉に貯ふ必要を前と同様に有させるに至るべし。何となれば此等の諸土民は交易に依って有無
相通するを得ればなり。然れども水問題に於ては余は此土民を全然疏立すものと仮定せり。故

に此有無相通するといふ事は問題外なり。
「ものに非ず。余は前者を自然的欲望に於て見る。'

「今迄に漂泊せる民族あり、彼等は野生の果実や其漂泊せる魚を依りて生活す。而して彼等の
生活の順序に於て、吾人は彼等が漂泊せる自然的欲望あるを見るのみ。然れども余が前日假定せる
彼等は漂泊せる果実を充分に供給させられに至るときは、更に他の場所に移動す。此生
活順序に於て、吾人は漂泊せる果実を充分に供給させられに至る自然的欲望を見るのみ。'

「彼等の漂泊せる果実を充分に供給させられに至る場所に於て漂泊せる自然的欲望
を満足せめる所を示す。此士民の初めの人事の順序、自然的欲望は、自然的欲望と相違
ず漂泊させるものにして、彼等の自然的欲望を満足せんと欲
望を満足せんと欲望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
望を満足せんと欲
し、且つ之を欲望（Wunsch）するに至ることあるべきなり。

此土民の起させる始めの諸欲望は、社会秩序の本質を成す。此等諸欲望が無くなければ社会秩序も
亦失はら。盡し此等欲望は、たと讀取者せる蠟燭に向っては自然的といふを得べし、社会に於け
由に本つさ、余は今後著に吾人の生命維持に必要なるものをのみならす、文明社会の構成に缺く可
からざるもの諸欲望をも、自然的と名づべし。而して余は人為的（Willenheit）なる諸欲望を以て、社会秩
序（Rechtsordnung）に重要な非ずして、從て之を無くとも文明社会は存在し得る所の諸欲望を意味
すべきなり。

凡そ一の物が吾人の何等かの欲望を充足を得る時は、之を有用なりと謂ひ、物が何人の役にも
立たず、又は吾人が之を以て何をも為し得ることなければば、之を不用なりと謂す。吾人は此等用
用（Nutzung）の大小を測るものなり。即ち吾人は物が吾人のそれを用むらんと欲する事
件に適する度合を判断するものなり。此時欲有の限界（Einengung）は吾人の物価（Wert）を称するも
のるなり。一物が用有するといふことは、他ならし、其物が或る用途に適ふべきふとなり、又は
诸物の価値は其效用に本づく。換言すれば吾人がそれに用有する欲望に本づく。更に換言す
今取りに主に私を意図に要する小麦の量の十分一が不足することを、若し人が此缺乏を認識し、且それが只十分一ののみなることを確知するならば、此小麥の十分九は只の価値を有するに過ぎざるべし。然るに事実は斯の如きを得ず。人が稲穀の時に出し、手を振るる如く、缺乏の時には甚大憂慮。故に只十分一の不足の時には、人は十分一、又はそれ以上に判斷す。人は或は小麥が全然戦場なる時あるを知る。従て十分の一不足は、それが三十分又は一二一にも姑し恐怖を起す。
なるべし。斯の如く人の意見が不必要な大観であることは、小麥を所有する人々は之を保存するを勉じて、

而して不足の心配は彼等をして、其必要とされるよりも以上を貯蔵せしむべし。斯くして土民の一部

に於て不足が実際に起こることとなるべし。斯様態の下に於て、小麦の価値は、意見が缺乏を過

大観する度合いに比例して減ずるべし。明かならんなり。若し諸物の価値が諸物の效用に本づかばり、

效用が同一に止まるとき、共等の価値の大小は、共等の価値の大小

値に何人も著する必要なりと思考せらるこれも前も価値を有するか如く見ゆるものあり。共著

るしき一例は水なり。人は曰く、水はござごに在り、之を得る為には何を要せす。運搬に依り

て水を受く可き価値は、水の価値に非す。それは只運搬の費用の価値に應じて判斷するものなる

も共等の価値に於て公開可きに非すや。
故に余は斯く言はんと欲す。河岸に於てすら水は一の価値を有す。但しこれは至小なり、何

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見

水の一杯は百錢を贈す。價值は物の上よりは、吾人の欲望に对して無限に過剰なるか為なり。反則に、乾燥せる地方に

於ては水は大なる価値を有す。而して人のそれを水を運ぶ距離に比例し、又は其困難に比例して見
余の庭園内に働く農民は余が彼に約束したメモを読むのに行動する。而して彼の労働は誠に第
一撃より始まることを注意すべき。何となれば、若し此第一撃より始まるならば、彼の労働の
始まる所を何人も知るところを紛争するべき。

この第一の考察に従じて、余は今へか。余が川へか。余が川より遠く隔たって居る時に、
余は之を浄めに行く行徳を要すべき。其行動は即ち労働なり、何となれば其行徳は余の利益な
ために為するのである。面して余が川の岸に居る時は、水は之を得るためには余の身を屈める
水を要するのみならず、其行徳は至てなる労働なりと認め得べし。前述の論の第一撃よりは小
なる労働なり。然れども、水は余の所へ。それを持来に要する労働を直すべし。若し余が自身
に水を取に行はざるならば、余は之を浄めに行くを欲さざるならば、余は余の所にそれを得て
取に来る人の労働に報ふるべし。故に水は之を得るためには余の身を屈める
水を要するのみならず、其行徳は至てなる労働なりと認め得べし。前述の論の第一撃よりは小
なる労働なり。若し余をしても、水は之を浄めに行

若し余をもし、之を新鮮にするに為には至る所に直すべし。余は然

論収

巻

第十八巻（第二篳二五）

三五
論説（スミモ氏コニャック氏の価値説）

第十八巻（第二巻一三）

何％ならば此光線為吾人の極の用途に供する為には、宜に照徳なる労務なり。何なならば、空気

余はこれに同一の事を、太陽が等々地球の表面に無布する所の光線に就て、言ひ得べき。

何となられば此光線為吾人の極の用途に供する為には、宜に照徳なる労務なり。何なならば、空気

の為も寒険なり。余の見る所を以て僅を得する。此稀少の為も寒険なり。余の見る所を以て僅を得する。此稀少の為も寒険なり。余の見る所を以て僅を得する。
第二 物の価格の根本

収に甲乙二人あり、甲は小豆を過剰に有して、麴酢酒を有せず、乙は反対に麴酢酒を過剰に有して、小豆を有せず。而して甲に不必要且過剰なる小豆は乙に必要にして、乙に向って過剰且必要なる酒は甲に必要ならず。若しこ甲の過剰は皆も甲の消費に向って必要ならば、乙は酒を提供して、互に相交易させんとす。此の場合にも酒は交易を為さんと欲すべき。故に甲は乙に必要ならず、乙は甲に不必要なら。
第十八参（第二十六 参

論 篇

斯ッ氏 《 シャ チ氏 》 佐賀氏 仏 賛説

如何、欲望する所の物を得ればなり。此場合に甲は小麦乙に向けて直打する所は、何も乙の
酒が甲に向計直打する所と同じ見極めなり。

然れども、若し甲の過剰は乙の消費に向計充分ならざるときは、甲は其小麥の過剰を乙の過剰において同じ見極め、乙は其酒が甲に直打する所は、何も甲の小麥が乙に直打
する所と同じ見極めなり。

斯くして、甲は乙に小麥の過剰の一部を曽みとするべし。何となれば甲が乙に興ふる物は
乙に多くを曽みし。乙の甲に興ふるもののは甲に少しを曽みすれども、
乙に就て見れば、乙は其酒の過剰を以て彼の消費に要する小麥の過剰を得るべし。故に
若甲が乙に興得する所の小麥が乙に不充分ならば、乙は其酒の過剰の一部を甲に興ふるべし。}

斯くする間、二人の欲望は二人を以て必ず或は決定を為さむるに足らず。何となれば乙
は小麥を要望し、甲は酒を要望すれども。
抂乙は甲の欲する酒の経験を甲に興えることを欲せや、又興えるを得ざる故に、甲は稍き
消費を為さんと決心すべし。而して乙は又小妻に就て其消費せんを欲したりと云ふ
に酒の稍多量を興へんとすべし。而して相互数回の提議の後二人は遂に意見の一致を見
るべきべし。例へば二人は一時の酒を一案の小妻は其価値を等しくすさよりの協定に達するべし。
二人が相互に提出を為す時は、互に値切り合ふべし。斯くして意見の一致に達しない時に取
引は行はるべし。抂一人は一案の小妻の乙に値する所は恰も一時の酒の甲に値する所と同じと見
積りたか。
語の発音の意味は今日見綴るなる語の示す所の意味ならし。第二に、語は相互に価格なり。甲の小妻は乙の酒の価格なり。面して乙の酒は甲の小妻の価
格なり。何故ならば、二人の間に行はるる取引は、谷も乙の酒が甲に向けて有つ所の価値を同じ
するも亦不可なり。吾人が一物にて欲望を有する故に、其物は価値を有るなり。甲は物质は自
己に於て、面か

反対に物は吾人が交易を行ふる時に於てのみ価値を有するものなり。何故ならば、吾人は物を他
の物と比較するに當り、只それを吾人が交易せぬことに見極めるに過ぎさるべきなり。面して其
価格は、既に言へる如く、交易の下に吾人が其価値他の価値と比較する時に、吾人が其価値に
就て為す所の見極めり。故に価値は価値が假定す。是れ此段の従々混同する所なり。但し場合
に使用ては、此

ご言葉が一様に用ひらるる所あり。然れども、本段此言葉は混同すべきからなる一の意義を示す

論収

第一葉 --- 三

第十八章
第三 價格の変動

余輩は価格は価値に基づくことを説明したり。面して此価値を或るものは変動す。従て、価格を

第一 通常、価値は価格を価値の知く変動せしむ。而して価格を価値の大小に比例して変動

第二 諸物の価格は人民が同じ価値にが同欲望を有つ場合に於ても変動し得るものなり。此

収穫後にて、余は数倉に過剰なる小米を有し居れども。而てに之に反して、過剰なる酒は、皆

余の小米を欲望せる十二人の酒倉に分配せられしやうと假定せよ。而して

前年に於て余は一樽の酒に對して一俵の小米に異へたる故に、彼等の酒を交易せんとされて来れども。面して

揺さ下りしと

難と、今日は余は十二人と取引す。面して余は彼等が食事成すよりの酒の統ての量を欲せる
より、余は余に所存ある可く多くの酒を與ふる人にのみ小麥を與べきことを告げ、断くして余は彼等をして余に取利益ある出更有得を為すべきことを得し。其結果、余の小麥は彼等に向ては前よりは高くなり、彼等の酒は余に向つては安くなるべきなり。

数多の人が各所有する一の貨物を貰ひて欲する時は、此際は、価格は決して第一の仮定の時の如くなるを得ずして、小麥の価格は下り酒の価格は上るべきなり。

此価格の変動は、謂ひて絶對的価格なるものの有を得かからざる事を明確するもの謂へども、小麥に比し下り高き価格を有つて謂ひ、小麥は安き価格を有つて謂はるるなり。酒は小麥に比して高き価格を有つて謂はれ、小小麦は各所有する人の貨物を貰ひて欲するに相比較していふに外ならず。例へば若し余に多量の小麥に対しても少しの酒を興ふるときは、酒は小麥に比して高き価格を有つて謂はれ、小小麦は安き価格を有つて謂はるるなり。反對の場合に於ては、小麥の価格は高く、酒の価格は低下せらるるなり。
第四章 結論

論文の第三者であるアダム・スミス氏の価値及び価格に関する説の理論を述べた。第二章に述べた論文の価値及び価格に関する説に関連する内容を述べ、第二章に述べた論文の価値及び価格に関する説の理論を説明する。
第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説

第十八巻 第三号 二月

論巻
スミス氏を含むラカ氏の価値説
からや思考した。然にプラウスは、常有する客観的要素を採らず、只主観的な欲望を
以て価値の根本と為し、物の正値なる価格は、個人が勝手に定めるものに非すして、
社会的平均の欲望に従ふものとなりと思考した。
コンデュック氏に比しての居は、価値の価格及び価格の公平にしたがり、其詳細
は余が前章に掲げたる理由によりて之を知るべし。氏は曰く、一ととき諸物は吾人の用途に適する
性質を有つに由てのみじめて価値を有つべしと雖も、若し吾人が諸物の専有する
判断を於てなるものどもを知るべし。氏は曰く、一ととき価値は主として
以て吾人が效用に就ての判断の上に在るなり。面して吾人が诸物の価値の大か小さを判断するに
由てのみ、諸物の価値が大なりは小なるものがなり。氏は又曰く、価値は、一と无に就て
積ずる価値を他の物に就て見積る価値に比したるものに外ならさる。即ち一部に就ての物に
積ずる価値を他の物に就て見積る価値に比したるものに外ならさる。面して吾人が
以て価値を有するののみならし、而して一部に就ての価値を他の物に就て
積ずる価値を他の物に就て見積る価値に比したるものに外ならさる。即ち一部に就ての物に
積ずる価値を他の物に就て見積る価値に比したるものに外ならさる。面して吾人が
今日に於て，所説の要を録せらるる，アダムズリスニを釈解せんと，去而今を時事沿革を展開したり，然に則ち吾人経済学徒が，

之を以て，横部と比米に至る航海中にして，更に起稿し，綴に之を続らしを得る所に上りたるを以て，行文の如くならす，考証思慮に豫期の十一を達する能はざる，余の大に遺憾の為も少からざるを以て，並に略に至らし筆を翻することをせざる。時に大正十二年八月廿五日

太平洋上，ウィクトリア港を距四日程の所，日本郵船株式会社船員登岸丸の船内に於て誠。